

市民文芸

歌壇

岩崎 聰之介 選

あの日より軒のつばめは難を避け今に戻らぬ
 いか居るらむ 遠藤 行夫
 被災者のこころ励ます遅桜がれきに咲けり風
 つめたくも 斎藤 典子
 冷蔵庫満たせば夕べ安らげど余震に不安をつ
 のらす老い 阿部はぎの
 あちこちと更地になれば見るたびに雑草繁く
 淋しさつふる 遠藤 舞
 此の春は桜咲けども震災にて愛づる気分もな
 にかうすれぬ 八嶋 正子
 白石は見渡すかぎり桜花ざかり施設にありて
 遠目に愛づる 山田 濱
 一瞬の若葉のかぜに染まりつつ咲く花ながめ
 庭いじる日日 高子たちばあ
 目に見えぬ汚染に追われて人影なし町を守れ
 る花のトンネル 阿部みさ子
 涙もう枯れ果てぬでも生きるんだ被災の町に
 ひびく楳音 後藤今朝雄
 自然とふたいなる力容赦なく人々の生活一瞬
 にて攫ふ 寺崎 悦子

【評】一首目、三月十一日のことであろう。帰らぬ燕を心配する作者。結句を「あらなむ」などとすると、「あつてほしい」となつて、分からなくなるので注意したい。
 二首目、いずこの被災地であろうか。桜の生命力をほれほれと詠う。
 三首目、震災時の実感がよく出ている。

俳壇

遠藤 秋尾 選

葉桜に染りて想ふ城の庭 岩澤 伍峯
 月出でて声の高まる蛙かな 高子たちばあ
 日々どこか田植おほりし田圃かな 福原 峯子
 静けさに支配さる街駅薄暮 斎藤 典子

春の山昔遊びし草刈場 阿部はぎの
 笛も子もすくすくと天めざす 寺崎 悦子
 早起きよろこび茄子の花にあり 制野 リエ
 花ちりてあの満開の頃想ふ 木村 貞雄

【評】一句目、葉桜の明るい日差しのお城の庭に心安らぐ一刻を過ごす作者。
 二句目、田植えが終わったばかりの田面に月の光がきれいに映る。鳴き声高く蛙の夜となる。
 三句目、大津波に被災した農地はまだまだ瓦礫の山。ここ内陸の田圃は日々植田となつていく。一日も早い復興を願う作者。

柳壇

四電 英夫 選

何もかも番狂わせの大地震 寺崎 悦子
 新聞も元氣戻りつ厚み増し 遠藤 行夫
 散歩して午後は昼寝の理想郷 宗像 孝喜
 震災でブルーシートの屋根寂し 平間 大恵
 困り事につり母の知恵袋 草野 清
 被災地の花一輪が勇気くれ 水戸 光穂
 生かされて語り合う友無く老いぬ 高子たちばあ

また一つ増えた病も年のせい 阿部みさ子
 東日本出るか政治家宗教家 山田 風流
 地震からあつという間に新緑へ 本沢 幸子
 悲しみを抱えながらの衣更え 斎藤 典子

【評】一句目、震災はすべてを狂わせた。イベント、お祭り、選挙まで。すべてがリセットされた今、確かな一歩を信じたい。「千里の道も一歩から」
 二句目、震災直後の新聞は、ページも少なく、見出しだけが巨大だった。今やつと元の紙面に戻りつつあり安心が戻った。「広告に抱かれ朝刊届けられ」
 三句目、こういう生活を悠々自適と言うのだろうか。太陽と共に目覚め、星と共に眠る。自然の摂理にかなった生活が長寿の秘けつか。

「三姉妹都市」

風間市長の風のことわざ

以前に「なぜ兄弟都市ではなく姉妹都市というのでしょう？」という質問をしたのを覚えていますが、「姉妹都市」という制度がはじまったのは第二次世界大戦後。当時のアメリカ大統領アイゼンハワーは、戦争で壊滅的な打撃を受けたヨーロッパの各都市を復興させるために、アメリカの各都市と姉妹都市の条約を結ばせ、民間レベルでの協力を強化しようとした。

ヨーロッパの言語を勉強したことのある人ならお分かりの通り、ほとんどの国の言葉には名詞に性別があります。フランス語、ドイツ語、スペイン語などほとんどの言語で「都市」は女性名詞とされているため、「姉妹都市」となったわけです。

東日本大震災では、この姉妹都市の互助関係の威力が発揮され、白石は大いに助けられました。特に、登別市と海老名市という「三都市間交流」が功を奏したのです。きっかけは、一年の農業祭に登別市・海老名市の両市長が訪れたこと。私自身、個々にはお会いし親しくしていましたが、三市の市長が一カ所に参集するのは初めての出来事

でした。そこで、観光や防災などをテーマに互いの意見を出し合おうと「三市長鼎談」を行いました（この様子は平成22年1月号に掲載）。この時から、登別市と海老名市の親密感が増し、北海道・関東・東北の三都市が、姉妹都市という枠を超えた新たな相互関係を生み出していったのです。

その第一段が、昨春に調印した「相互応援協定」。この震災で見事な連携プレーが行

なりました。その一例が支援物資の搬送です。白石から支援物資を求めたとき、震度5弱を記録した海老名市でも物資に限りがあったため、直接的な被害がなかった登別市に応援を要請しました。しかし、仙台空港も仙台港も被災していたことから登別市から海老名市には空路で、海老名市から白石市にはトラックで搬送していただきました。

そして4月29日、「トライア

が真ん中です。このトライアングル交流がいつまでも続くことを切に願います。そして、末永く互いを思いやる関係でありたいものです。

ちなみに、ロシア語では「都市」は男性名詞のため、兄弟都市といっているようです。また、名詞に性別がないイギリスでは、こうした関係の都市を「双子都市」と呼んでいるそうです。

このトライアングル交流の成功には、登別市の小笠原春一市長、海老名市の内野優市長の行動力と発想力はもとより、市民の皆さんの理解が不可欠でした。このお二人と両市の市民の皆さんとの出会いに厚く感謝しています。

また、三市長の共通点は明るさと人懐っこさ、そして気の短い所でしょうか。年齢では、内野市長が長兄、小笠原市長が末弟、私が真ん中です。

※姉妹都市の質問は平成18年8月号に掲載しています。

まちの話題

～あの日、あの時～

施設と地域の絆を育てる 福祉施設から保育園などにカブトムシの幼虫を贈呈

5月17日、社会福祉法人白石陽光園「生活介護とも」(小室真二施設長)の利用者と職員が北保育園を訪れ、カブトムシの幼虫30匹を贈呈しました。同施設では平成18年から、シイタケ農家から不要になったほだ木を譲り受けカブトムシを飼育。「地域との接点になれば」と市内の保育園や幼稚園、小中学校に贈呈しています。震災の影響でカブトムシの成長が不安視されましたが、今年も例年と同じ約250匹を用意することができました。

北保育園では4・5歳児23人が幼虫をお出迎え。初めて見るという園児も多く、約7割に育った幼虫を目の前に、興味深そうに見入っていました。また、園児たちは施設の職員から、「幼虫には素手で触らないように」「成虫にはスイカやメロンの皮をあげてはいけません」と、

飼育のコツを真剣に学んでいました。カブトムシの幼虫は約1カ月でサナギから成虫へと成長。園児たちは「成虫になるのが待ち遠しい」と楽しみにしていました。



▲カブトムシの幼虫を目の前に歓声を上げる園児たち

—思いやりのある良質で信頼される医療を目指して—

公立刈田総合病院紹介



公立刈田総合病院 ☎25-2145

新任医師紹介

眼科医師 目黒 泰彦

6月1日付けで、公立刈田総合病院の眼科に赴任しました目黒泰彦です。

これまでは東北大学病院眼科に勤務しており、主に白内障・角膜疾患の治療に取り組んで参りました。

このたび、刈田病院で勤務させていただくことになりましたが、眼科一般診療はもちろんのこと、地域医療の観点から、特に「白内障手術」に精力的に取り組ませていただきたいと思います。

一般的に、白内障による視力低下は加齢とともに進行し、高齢化社会の中でその治療に大きなニーズが生まれています。一方で、最近の白内障手術は医療技術・機器の発展がめざましく、大変小さな傷口から手術を行うことができるようになりました。手術時間も短くなり、痛みもほとんどなく、視力の回復も早い安全な手術として進歩しております。

刈田病院では、最新の技術・機器を用いて、わずか2.2ミリメートルという傷で手術を行っております。患

者さまには、「よく見えること」を通じて充実した人生を過ごしていただけるよう、微力ながらご協力したいと考えております。

もう1点は「感染症」です。農作業中に目に草木や石が飛び込んだりすると重症な角膜炎をおこしてしまうことも。眼科では、地域の方々の「眼」を感染症からも守りたいと思っております。

よろしく願い申し上げます。

